

説教「希望の源」

著者	原口 尚彰
雑誌名	大学礼拝説教集
号	19
ページ	63-68
発行年	2015-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024645/

説教「希望の源」

大学宗教授任 原 口 尚 彰

¹主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

²わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

³あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによつて祝福に入る。」

4 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

アブラムは、ハランを出発したとき七五歳であった。5 アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方に入った。6 アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの櫟の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。

7 主はアブラムに現れて、言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

8 アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。

アブラムはそこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。9 アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

(創世記二二・一九)

人間の生活には過去・現在・未来という三つの側面があります。一般的に言われているのは、青年は未来に生き、壮年は現実に生き、老人は過去の追憶に生きるということです。例えば、青

年は若いのでまだ自分がどのような人間になるのか決まっています。未来の生活はまだ現実ではないのですが、それだけに様々な可能性が開けています。しっかりと意志を持ち、一定の方向性を持って努力をすれば、それなりの目的を達成することが出来ます。それに対して、壮年は既に社会の中で一定の地位や役割を持っており、その責任を果たすことが大切です。最早人生の折り返し点を過ぎており、後戻りすることも出来ませんし、未来への選択肢もそれ程多くありません。老人になると残された人生の時間は長くありませんし、現役を引退しているので、思いはどうしても自分が若く元気であり、楽しい人生を送っていたころの思い出に向かいます。老人が家族や知人に同じ過去の思い出話を繰り返し、繰り返し語ることもしばしば見られます。しかし、最近、私は自分自身が老年期に近づくにつれて、青年期・壮年期・老年期についてのこのような固定的イメージは改めなければならぬと感じるようになりました。先日、何気なく点けていたBS放送の番組に聖路加国際病院名誉院長の日野原重明さんが出て来て、女性のアナウンサーのインタビュウを受けていました。日野原さんは一〇三才の内科医であり、ご高齢でも非常に元気で執筆や講演活動に忙しくしている方です。この時もインタビュウの言葉に非常に的確に答えていました。その中で、アナウンサーが、「年をとっても何時までも若々しさを保つ秘訣は何ですか」という質問をすると、規則正しい生活をして健康を保つことや、何か生きがいを持つことの他に、

若い人たちと交わることや、何か自分がやったことの無いことに挑戦することだと答えています。一〇〇才を超えた人が新しいことを試みる気持ちを持っていることに驚いたのですが、日野原さんは実際のところ、最近作曲や指揮をしたり、若者達が利用するフェイスブックを試みているそうです。確かに、年を取っても自分の知らないことや体験したことがないことは沢山あります。世界は未知と不思議に満ちています。どんな些細なことでも良いのですが、新しいことを発見したり、新しいことを試みてみるからこそが、どの年代の人間にとっても精神の健康と若さを保つ秘訣であると言うことが出来ます。

さて、今日の聖書はイスラエルの父祖アブラハムの新しい旅、新しい人世の冒険について語っている箇所です。アブラハムの先祖は元々メソポタミア下流の古代都市ウルの辺りに住んでいましたが、父親のテラの時代に、上流のハランに移住していました（創一一・二七—三三）。このハランにいるときに、アブラハムに神の言葉が臨んで、神が指し示す約束の地に旅立つように促しました。その時、アブラハムは七五歳の老人でありましたが、神の言葉に従い、一族郎党を引き連れ、全財産を携え、カナン（つまり、後のイスラエル）の地に向かってやって来ましたが（創一二・一—九）。考古学者によれば、その頃のオリエントの人々の平均寿命は四十才以下だったという事なので、当時のアブラハムは平均寿命を三十才以上超えた老人であったということにな

ります。そのような高齢の人物に神は約束の地を示して旅立つように促したのです。アブラハムはもとより高齢の身ですので、あと何年生きるか分かりませんし、この時は息子のイサクも生まれていません。人間的には全く見通しがないままに、神の言葉だけを頼りに、人生の新しい旅立ちを行ったのです。

それは、紀元前一八〇〇年位の気の遠くなるような昔のことですが、実はイスラエルの民族の始まりを示す出来事でした。アブラハムが神の言葉を信じて従うということがなければ、イスラエルの地にユダヤ人が住むこともありませんでしたし、「アブラハムの神・イサクの神・ヤコブの神」と呼ばれるような、神とイスラエル民族との特別な関係が生まれることもありませんでした。アブラハムにとり、ハランという土地は父親の時代から住んでいる慣れ親しんだ土地であり、そこには自分の現在の生活の基盤があり、頼りに出来る親族も沢山住んでいました。それに対して、約束の地を得ることは未来の可能性にしか過ぎませんでした。しかし、アブラハムは神の言葉の故に、現在の生活よりも未来の可能性の方に賭けて旅立ったのでありました。カナンの地にやって来たアブラハムに、「あなたの子孫にこの地を与えよう」という神の言葉が臨みますが（創一二・七）、この約束が実現するのは五百年位経ってからで、アブラハムとその子孫はカナンの地では寄留の遊牧民として先住民族の間に家畜を追って暮らしていました。ヘブライ人の手紙は、

このアブラハムは約束をした神が真実な方であると信じ続け、希望を持って一生を送ったと語っています（ヘブー一・八―一六）。未来へ希望を持つためには、その希望の根拠ということが問題になります。アブラハムは未来の希望の根拠を、真実な神の言葉に置き、その希望は失望には終わらず、実現したことを聖書は語っています。皆さんが聖書の言葉の中に、将来の人生の確かな礎を見出し、希望が与えられることを望みます。